

進み完全臥床の末期症状となった。この時点でMRI上は中脳の萎縮が認められるようになったが、前頭葉の萎縮はそれほど強くはなかった。脳血流シンチグラフィによる前頭葉の血流低下は全過程において明らかであった。

PSPは皮質下痴呆の代表であるが、形態的变化に先んじて前頭葉症状に一致した血流の低下を認めたことは、本検査の診断上の有用性を裏づける結果と考えられた。

13. 心臓、大動脈疾患における脳血流シンチの意義

中島 弘道 松村 要 竹田 寛
中川 毅 (三重大・放)
北野外紀雄 (同・中放)
小野 元嗣 (山田日赤病院・放)
鹿野 和久 草川 実 (三重大・胸外)

胸部外科手術を目的として来院した大動脈瘤、弁疾患、虚血性心疾患70例に対し、脳血流シンチを行い、各疾患における脳血管障害の合併および、術後の精神症状との関係について検討した。各疾患において高率(60~85%)に脳血流シンチにて異常所見を認めた。また、術後に精神症状が出現した症例(6例)では、全例に術前の脳血流シンチに異常所見を認めた。

以上より、脳血流シンチは、心臓、大動脈疾患における脳血管障害の合併の有無の診断および術後の精神症状の出現の予測に有用であると考えた。

14. ^{99m}Tc 標識 PPN-1011 による急性心筋虚血時 area at risk の評価

渡辺佐知郎 松尾 仁司 西田 佳雄
後藤 明 牧田 一成 渡辺 浩志
(県立岐阜病院・循, 中放)
今枝 孟義 (岐阜大・放)

Tc 標識心筋血流製剤 PPN-1011 を不安定狭心症 5 例、急性心筋梗塞 4 例に急性期治療前投与、治療後撮像することにより area at risk の評価を行った。全例において急性期治療を遅延させることなく検査施行が可能であった。9 例中 8 例で急性期に比し慢性期で欠損が縮小した。また欠損のない区域、欠損の改善(+)区域、欠損改善(-)区域において急性期から慢性期の壁運動変化を検討した結果、欠損改善(+)区域は他の 2 群に比して有意に壁

運動の改善が認められた($p < 0.01$)。以上より ^{99m}Tc PPN-1011 は急性心筋虚血時 risk area の評価および急性期治療の判定に有用であると考えられた。

15. 核医学検査による心筋梗塞症の Quality of Life (QOL) および予後評価

立木 秀一 近藤 武 江尻 和隆
安野 泰史 (藤田保衛大・衛・診放技)
西村 哲浩 沢田 武司 横山貴美江
榊原 英二 竹内 由美 (同・放部)
徳田 衛 坂倉 一義 黒川 洋
渡辺 佳彦 水野 康 (同・内)
中村 元俊 古賀 佑彦 (同・放)

〔目的〕 心筋梗塞症の予後評価における亜急性期に実施された心臓核医学検査の有用性について検討した。

〔対象〕 1979 年 6 月から 1991 年 12 月までに急性心筋梗塞症で当大学 CCU に収容され、現在までの生死が確認できた 909 例である。

〔方法〕 T1 欠損を視覚的に大中小の 3 群に分類し、累積生存率を求めた。

〔結果〕 T1 欠損大群、EF 重症群ほど累積生存率は低かった。また、心臓核医学検査が実施できなかった群の累積生存率は実施群より有意に低かった。心臓核医学検査は予後評価に有用であると考えられた。

16. VEST による肥大型心筋症の運動負荷時心機能の評価

滝 淳一 中嶋 憲一 分校 久志
谷口 充 村守 朗 松成 一朗
利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)
清水 賢巳 (同・二内)

肥大型心筋症30例(男性26例、女性4例)を対象とし、仰臥位自転車エルゴメータによる多段階運動負荷を施行し、CdTe-VESTを用い、心機能変化ならびに心電図変化をモニターした。運動負荷中のEFは負荷前値より低下するものを異常反応とし、心電図では0.1 mV以上のST低下を有意な変化とした。22例においてST低下を示した。ST低下群では最大運動負荷時ESVがST非低下群に比べ有意に大きく(130 ± 30 vs. $72 \pm 24\%$, $p <$